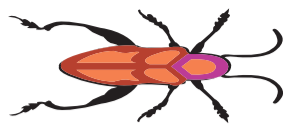


特別展 昆虫



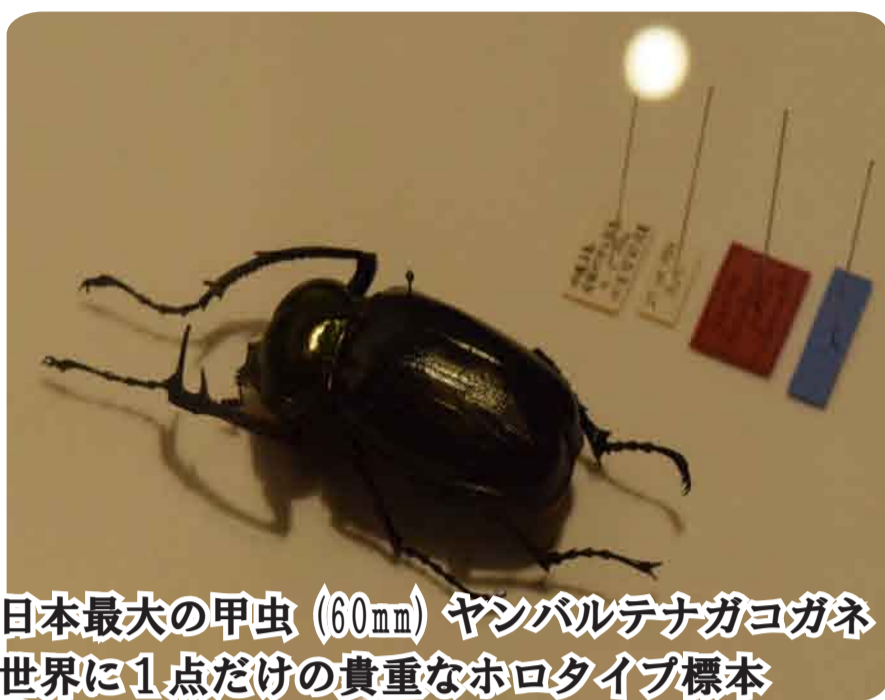
人生の

大先輩から学ぶ 生命の神秘と謎

Published by Omiya West High School's
NEWS PAPER CLUB
電光石火
Published by Omiya West High School's



全長約2m オオクワガタの巨大模型



日本最大の甲虫(60mm) ヤンバルテナガゴガネ
世界に1点だけの貴重なホロタイプ標本

*ホロタイプ標本とは
その種の学名の基準となる唯一の標本。
HOLOTYPE と書かれた赤いラベルが、付けられている。

上野の国立科学博物館にて7月13日(金)から10月8日(月・祝)にかけて、「昆虫」をテーマとした初めての大型特別展「昆虫」が開催されている。

編集・発行
大宮西高校新聞部
H30.7.20
No.1158



7月12日(木)、抽選で選ばれた越谷北高校新聞部と大宮西高校新聞部が、国立科学博物館にて開催された特別展「昆虫」のプレス内覧会兼開会式に、高校生記者として一般報道記者の中に混じり参加した。

特別展「昆虫」は、最近昆虫が注目を集めていることや、世の中に昆虫の本が数多く出回っていることを受けて開催されている。また、本展では多種多様な昆虫の体の仕組みや能力、生態について多角的に紹介されている。

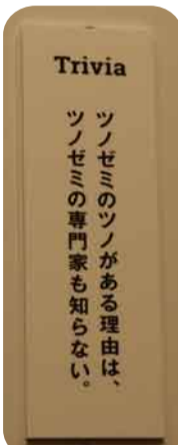
見どころが特別展史上最大クラス!

目玉となっているのは、インド洋マダガスカルにて発見された「青蜂の新種」、世界に1点しか存在しない「ヤンバルテナガゴガネ」のホロタイプ標本など。会場に入り圧倒されるほど貴重な標本が展示されている。

この他にも、約2mの蝶や蟬、蚊の巨大模型や琥珀の中に閉じ込められた状態で発見された、日本初公開の絶滅目「アリエノプテラ目」。昆虫かどうか疑いたくなるほど鮮やかな色のボディを持つ昆虫や奇抜な形をしたマ



マルヨツコブツノゼミ 実物 体長5mm
の35倍模型



よく見よう
トリビア
ツノゼミのツノがある理由は、ツノゼミの専門家も知らない。
探して、見よう

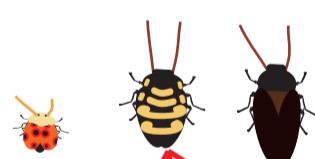
今回のプレス内覧会にて監修の先生方に昆虫や昆虫採集についての貴重な話を伺った。例えば、体長1、2mmほどの極めて小さな昆虫の採集方法。これは、まず最初に土ごと回収し、その後ツルグレン装置を使って虫を採集する。ツルグレン装置は回収した土をフルイの上に乗

井手先生に聞いてみた 極めて小さな虫の捕まえ方とは

「苦手な方、心臓が弱い方は、どうぞ迂回ルートをお通りください」と書かれたGの部屋。あの茶翅や高速で走り回るゴキブリとは違う、緑色の美しいケラシマルゴキブリやキイロテントウ、ウゴキブリなど色鮮やかなゴキブリもいる。一方で体長73mmもあるオオマダガスカルゴキブリの姿は、見るとすぐに展示窓から離れたくなるほどだ。

「苦手な方、心臓が弱い方は、どうぞ迂回ルートをお通りください」と書かれたGの部屋。あの茶翅や高速で走り回るゴキブリとは違う、緑色の美しいケラシマルゴキブリやキイロテントウ、ウゴキブリなど色鮮やかなゴキブリもいる。一方で体長73mmもあるオオマダガスカルゴキブリの姿は、見るとすぐに展示窓から離れたくなるほどだ。

ルヨツコブツノゼミなどの昆虫の展示や、個人の標本コレクション ションをはじめ数万点の昆虫標本を集めた「標本回廊」もある。また、ある昆虫だけを世界中から集め、その標本や実物を展示している「Gの部屋」(迂回ルート有り)、昆虫の裏側も見られる「360度回転画像」などの展示もされている。



この虫たちもG? Gの部屋

せ、その土の上から光を当て、そして光を嫌う土の中の虫がフルイから落ち、虫だけが採集できる装置だ。虫が採取できる過の装置とも言える。採取された虫はピンセットで回収され、研究される。きわめて小さな虫を採取する際には専用のピンセットや、ストローのように吸い上げて集める吸虫管などを使い、採取を行うそうだ。虫の採取は虫を傷つけないように細心の注意を払う必要があるため、機械に任せず人の手に行われている。虫の下の極小文字の標本ラベルも見物である。

見るだけでなく動いても学ぶ 昆虫企画(イベント)

特別展「昆虫」では多くのイベントも開催されている。応募者や応募者にとつて大切な人の名前が、「青蜂の新種」の学名になる、「新種昆虫ネーミングキャンペーン」などが用意されている。

特別展「昆虫」では昆虫の能力や生態がどのようにして人間の社会に活かされているのかということも知ることができ。昆虫に親しみ、昆虫に学ぶ「昆虫活」をしに行ってみてはどうだろうか。

ヤンバルテナガゴガネ

1984年に新種として記載された、日本最大の甲虫である。沖縄県の沖縄本島北端部の「山原(やんばる)」と呼ばれる森林地帯のみに生息する。本種はオスが最大65mmほど、メスが最大60mmほどになり、オスの前脚が長く前方に伸びているのが特徴である。長く伸びた前脚の内側には大きなトゲが1本生じている。前脚は横長の楕円形で金緑色をしており、胸部後方は黒色で緑銅色の光沢を帯びる。オスは前翅(上翅)の黄色の模様は少ないが、メスではかなりはつきりと黄色の模様が現れる。

夢を昆虫に託して

センター試験前日まで研究を

監修の先生方に本展の見どころや高校生時代の思い出、いつ頃から昆虫に興味を持ったのかなどの質問をし、昆虫の魅力について聞いた。

Q1 本展の見どころを教えてください

野村「5万点を超える昆虫標本が展示されています。研究家がどのような姿勢で昆虫を研究しているのかを見ることが出来ます」

井手「まず巨大模型を見てほしいです。細かいところまで忠実に再現されています。ニホンミツバチで言えば、前脚の根本にある、体に付いた花粉を挟み込んで落とすアンテナクリナーや花粉を溜め込む花粉バスケットも綺麗に再現されています。ここまでしっかりと作りこまれている模型はなかなかないので、個人的にはこの巨大模型を、一番に見てほしいです」

Q2 高校時代の思い出は何ですか

野村「高校は佐賀県のそれほど厳しくない学校で、生物部でした。小学5年生の時に入った昆虫同好会と

いうサークルに通って、中学校や高校の先輩から、標本の作り方を学びました。学校ではできないようなことを数多く教わりました」

井手「高校で生物部に所属し、3年間ずっと昆虫の研究をしていました。土日も休まず、センター試験前日まで活動し、ほぼ毎日夜遅くまで研究にうちこんでいました」

丸山「高校時代は、ワンダーフォーゲル部に入って高山植物の収集をしていました」

野村「4、5歳の時に興味を持ち、昆虫を捕まえて飼っていました。他にも勉強やスポーツなど、趣味は数多くありました」

丸山「3歳くらいの時に都会でカマキリを見て衝撃を受けました。小学校の夏休みの課題で初めて自分で標本を作りました」

Q4 なぜその虫を研究しようと思ったのですか

野村「中学の時に研究家の大石さんのアリヅカムシ（体長1mmから2mm程度）の研究に興味を持ちました。アリヅカムシは名前のない種が多くいます。非常にマナーな虫であるという点で面白く感じ、また研究している人が少ないため、自分だけが、アリヅカムシについて知ることが出来る、そのことが嬉しかったからです」

井手「もともとは生きものが好きくらいでした。ゾウムシが虫こぶを作ることから、虫こぶに興味を持ちはじめ、虫こぶを作る面白い虫を探していたところ、大学院生の時にタマバチと出会い、今に至ります」



ニホンミツバチの巨大模型を後ろに新聞部員の取材を受ける井手竜也先生

Q5 高校生にメッセージをお願いします

野村「最近の高校生は虫を嫌う人が多いのですが、虫をたくさん知ってもらって嫌いにならないでほしいです。これがこの展示の目的でもあります」

井手「虫に興味を持ってほしいです。虫を知ること、自然の見え方が変わり、自分の世界観が広がります。一つでもいいから好きな虫を見つけてその虫の名前を覚えてもらえればと思います」

丸山「周りの目を気にせず、自分が興味を持っているものを追究してほしいです。楽しいことは人に見せるためにあるわけではないので。好きなことを持つことは生きるための糧になります。どんな職についても好きなことを大切にしてください」

昆虫に対する熱意が伝わる先生方の話だった。

会場へのアクセス



JR「上野」駅から徒歩5分
東京メトロ「上野」駅から徒歩10分
京成線「京成上野」駅から徒歩10分

特別展「昆虫」
 休館日：9月3日、10日、18日、25日
 開館時間 午前9時～午後5時
 金曜・土曜日は午後8時まで 8月12～16日・19日は午後6時まで

| | |
|-------------------------------|-------|
| 当日券 | 1600円 |
| 一般・大学生 | 600円 |
| 小・中・高校生 | 2000円 |
| 金曜・土曜限定ペア得ナイト券 (午後5時以降2名同時入場) | |

公式ホームページ <http://www.konchuten.jp/>

主張

昆虫は見た目で決めないで

皆さんは「昆虫」と聞いてどんなことを連想するだろうか。「気持ち悪い」「触りたくない」と感じる人も多いのではないだろうか。

なぜそのような感じるのか。それは、生まれ育った環境によって身近に昆虫がいたのか、いなかったのかで違いが生まれる。近年ホームセンターに行けば山や森に行かなくても、気軽にカブトムシやクワガタを買うことができる。今では昆虫の商品になってしまっているのだから。やはり、子どもが自然の中で冒険し、昆虫に出会う喜びが昆虫採集の一番の醍醐味なのではないか。

7月12日（木）に国立科学博物館で行われた特別展「昆虫」のプレス内覧会に新聞部として参加した。日常で自分が見終った後、昆虫は多様性に満ちあふれていて、自然を豊かにする素晴らしい生き物だと気付かされた。そして、男女年齢関係なく多くの人が魅了する昆虫が多数いるということも知った。特別展「昆虫」に行く前までは昆虫に興味はなかったし、プレス内覧会にも行きたいとは思わなかったけれど、今ではこの夏休みに昆虫探しにも行きたいと思うまでになった。また、普段体験することのないプレス内覧会での取材は、実際に一般報道陣に混じって、専門の先生方から話を聞き、越谷北高校の新聞部員とその場に立たれたこともうれしかった。

首都圏に住む私たちは、普段から昆虫に向き合うことはなかなかない。だからこそ特別展「昆虫」は、まじまじと見ることに昆虫を肌で感じられる貴重なチャンスなのだ。これまで昆虫に対して抱えてきた価値観も変わるかもしれない。皆さんもこの夏、「昆虫」(昆虫とは、昆虫に趣味を持つ、学ぶ、採集するなど昆虫にかかわるすべての活動のこと)を試みてはどうか。